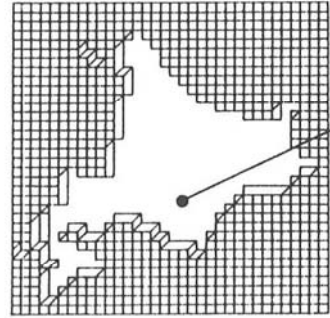


連載



しみず

あのマチ・地域おこし活躍中
このムラ

No. 5

十勝・清水町の事例

『清水町農業・農村活性化ビジョン』

国道二七四号線で日勝峠を越えると眼下に十勝平野が広がる。そこが酪農と畑作の町、清水町である。

▼自然条件

十勝支庁管内の西部に位置し、東西に三・一km、南北に三〇・七km、総面積四〇二・一km²。町全体の四五%が森林、農耕地は三九%である。

町の西界を北部日高山脈が南北にはしり、その山麓に十勝川に向かって緩やかに傾斜したスイスを連想させる景観の酪農畑作地帯が広がる。

土壌は通常フロホフと呼ばれる黒または褐色の火山性土壌が大平

を占め、一部十勝川流域に沖積土地帯があるが肥沃な農耕適地と言うことができる。

気候は、典型的な内陸性気候で夏暑く冬寒い。また昼夜の寒暖の差も激しい。このことは糖度の乗った美味しい畑作物・野菜が出来ることを意味する。

四〜五月の融雪・播種期は、乾いた季節風による土壌の飛散など干害・風害が発生しやすく、逆に六〜七月は低温と長雨に祟られる年が多い。八〜九月は猛暑の季節を迎えるが、最近はおホーツク海

高気圧の影響による天候不順(いわゆる冷夏)のまま早い秋を迎える年も多くなった。十一月〜翌年一月までは、大陸の高気圧の発達とともに北西の季節風の最盛期となり山岳部を除いて晴天冷涼な日が続くことが多い。

▼道東と中央を結ぶ交通の要

町内を南北に走るJR根室本線と、これに並行する国道二八号線および日勝峠を越える二七四号線によって日高・上川圏と帯広・釧路を中心とする道東との接点となっている。

このことは道東全体と札幌・都府県を結ぶ交通の要衝と位置づけられ、北海道横断自動車道の完成

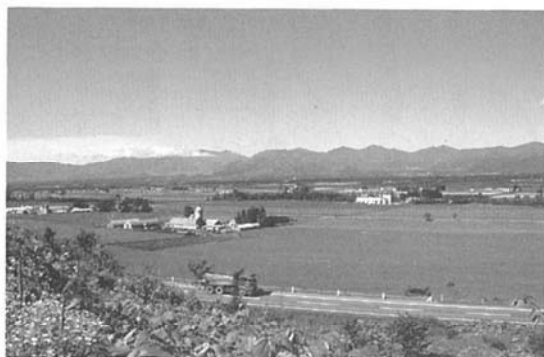
とともに更にその役割は大きくなるものと思われる。

▼清水町の沿革

清水町は明治31年、十勝開墾合資会社熊牛農場に二六戸・九十九人の入植に端を発する。同40年には落合〜釧路間に鉄道が開通し、往来者の増加とともに市街地が形成されていった。

昭和11年に町制施行、同31年に御影村と合併、33年に芽室町との境界変更により一部区域を芽室町に編入して現在の行政区画が確定された。このことが一部農家の芽室農協加入の要因ともなった。

農協も昭和53年、当時の清水、熊牛両農協が合併し、さらに55年御影農協を合併して現在に至っている。



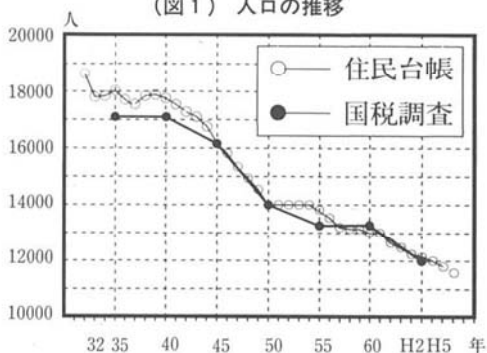
▲清水町の農場景観

▼人口・世帯数の動向

清水町の人口は、昭和40年以降減少を続けている。原因は他町村と同様離農農家の町外転出と若年労働力の流出である。

いっぽう世帯数は、昭和40年三六三七戸に対し平成5年四、〇七二戸と逆に増えている。このことは一戸当たりの世帯員が四・七人から二・九人へ減少したため、

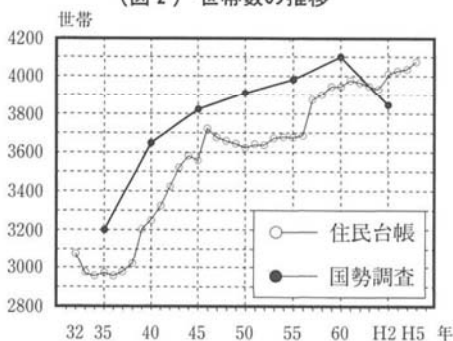
(図1) 人口の推移



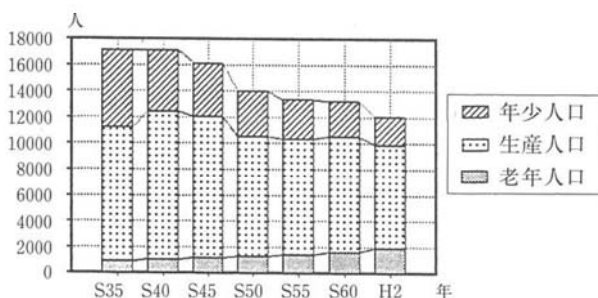
清水町においても核家族化が進んでいることを物語っている(図1、図2)。

また人口の年齢構成をみると、昭和55年と比較して三十五歳以下の青少年層が大幅に減少しているのに対し、六十五歳以上の老年人口が全体人口の減少にも関わらず増加している。特に、介護などの福祉サービスが必要となる七十五歳以上のお年寄りが昭和55年四九九人に対し平成5年八〇七人と、町全体人口二一、〇三三人の六・

(図2) 世帯数の推移



(図3) 年齢別人口の推移



七%を占めていることは、核家族化と合わせて考えらるならば深刻な問題と言える(図3)。

▼清水町の産業

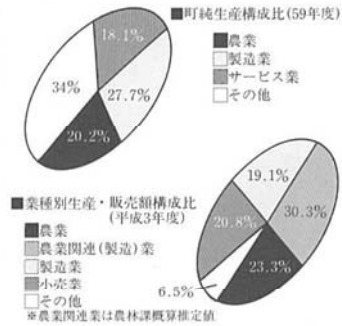
清水町には、乳製品工場、製糖工場、畜肉加工場、農産加工場があり、町の基幹産業である農産物の加工を主とする工業出荷額が、町総生産額の中で最も多く、この数年構成比率に大きな変化はない。しかし問題は、総生産額そのものが昭和60年をピークに停滞もしくは減少していることで、このこと

が若年層の人口流出とも深く関係しており、町の産業振興策の必要性が痛感される(図4)。

▼清水町農業の概要

清水町はその開村以来、小麦、豆類、てん菜、馬鈴しょといった畑作を主体として発展してきた。しかし山麓地帯を中心に酪農が規模拡大とともに生産を伸ばし、昭

(図4) 町内生産構成比率



和63年以降肉牛が急速に伸びてきた。また小規模ながらアスパラガスなど様々な野菜も生産されてきたが、農協の受入体制づくり・基幹作物としての振興体制づくりまでは至っていない。

あわせて、①農業後継者不足②労働力確保③離農跡地・農地再編④機械効率利用など、北海道の各地域と同様の課題を抱えているほか、清水町として⑤野菜振興にどう取り組むか⑥大型負債農家の再建対策、といった固有の課題もある(図5)。

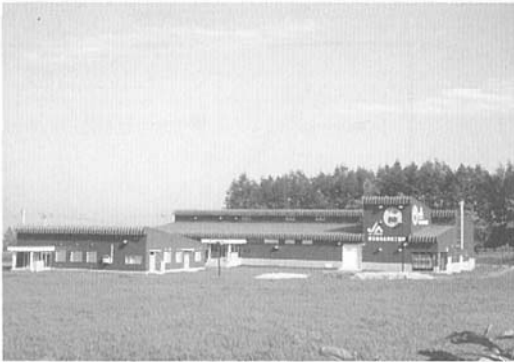
清水町は、「農畜産物は何でもあるが故に焦点を絞り込み切れなかった」と言えなくもない。

こうした中であって、地域とし

て取り組んできた政策で目立つものとして以下のことが挙げられる。

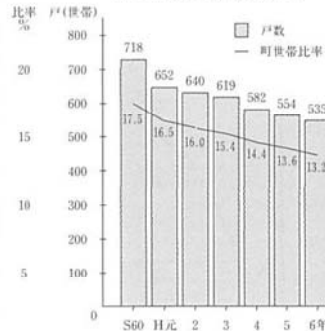
「見島F1牛」の生産と「十勝清水フードサービス」の稼働

清水町では、輸入自由化、国内競争の激化など様々な問題を抱えながらも、地域で急速に伸びている畜産振興の切り札として、昭和63年から和牛原種として脂肪交雑(サシ肉)の強い遺伝形質を持ち



▲十勝清水フードサービス

(図5) 農家戸数の推移



肉質評価も高い「見島牛」(国の天然記念物指定)の精子を、酪農家のホルスタインに人工受精した「見島F1牛」の繁殖・育成・肥育の一貫生産農家づくりに乗り出した。

二十戸の農家で「十勝清水町肉用牛振興組合」を結成し、生産技術の向上と情報交換を行っている。また肉質を評価されてコープこうべとの間で委託生産を行っている。

乾燥・貯蔵施設の整備拡充

麦、豆の乾燥貯蔵施設として昭和50年「西十勝農業センター」を建設し清水町・新得町共同施設として径年的に拡充してきている。

昭和63年には「加工馬鈴しょ貯

蔵出荷施設」が完成し、立ち遅れていた加工用馬鈴しょの集出荷機能が増強された。

農業情報システムの稼働

昭和60年に十勝管内一円をカバーする十勝農協連の「酪農情報システム」に加入し、次いで平成3年「営農計画システム」、平成4年「農業情報システム」が稼働開始した。

経営改善意欲のある農家にとつてこれらの情報は有力な武器となるが、農家の経営分析では、同程度規模の農家間で経営内容に大きな差があることが清水町の特徴ともなっていることからみると、農家間の情報交換が少ないことが指摘される。

情報はまず足元からということであろう。

第1〜2次地域農業

振興計画

農協では、昭和61年〜平成元年の第1次振興計画に引き続き、平成2年に「地域農業振興策定委員会」を組織し、平成3年〜7年の

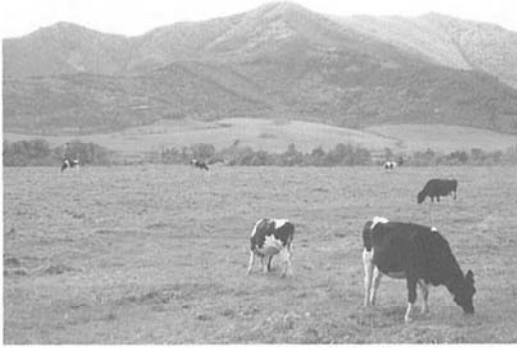
五カ年計画として「地域からの農業づくりと農協運営」をまとめあげ、平均農家所得六〇〇万円を定めた。

その骨子は次の通りである。

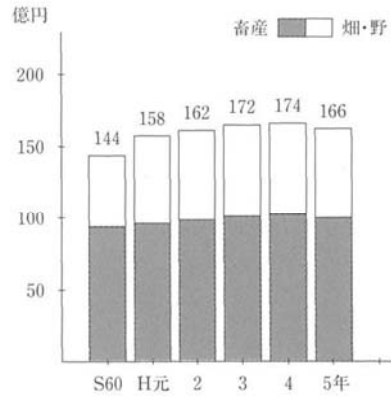
(1) 生産性の向上とコスト低減

- ・ 農業生産基盤の整備を進める。
- ・ 農業機械と生産資材の効率的利用を推進する。
- ・ 地域の特性に合った生産性の高い作物の選択導入を図る。

▲清水町営育成牧場



(図6) 農業粗生産額の推移



- ・ 革新的な農業技術の導入を積極的に進め、畑作物栽培や酪農の高度化を図り生産性を高める。

(2) 地域の活性化

- ・ 地域営農集団の育成を図る。
- ・ 機械利用の計画化により営農の合理化を図る。

- ・ 農畜産物の販売戦略を積極的に行う。

(3) 生活環境の充実

- ・ 健康対策、農作業安全対策の推進。
- ・ 高齢化、後継者対策の推進。
- ・ 青年部、婦人部組織育成強化

▲小麦の収穫作業



の推進。

・ 住宅を囲む環境の整備。
しかし農業を取り巻く状況の激変、特に自由化・規制緩和のために残念ながらこれらの目標の一部は達成に至らなかった(図6)。

平成6年、清水町と農協が一体となって「清水町農業・農村活性化ビジョンづくり」を開始した。まず全農家対象のアンケート調査を実施し九五%の高い回答率となった。

これを踏まえて清水町農業の抱える問題点の洗い出しと、改善の具体策を第3次振興計画として纏めるべく精力的に計画策定作業がすすんでいる。

振興計画策定の過程で農家自らが現状認識を深め、正確な情報交換の場として、『将来を語ろう!』をキャッチフレーズに「清水町農業経営者懇話会21」が、三月に一

二〇名の農家および関係機関、町民を巻き込んで設立された。彼らが発信する「アグリ・メッセージ」や定期的に行われるであろう「懇話会」が、清水町農業と

どのように係わり、変革の起爆剤となるのか見守りたい。

（レポーター
専任研究員 齊藤勝雄）

AGRI-MESSAGE NEWS NO.1



〈将来を語ろう! 清水町農業経営者懇話会21設立総会〉

アグリ・ メッセージ

農業大国清水

～清水町農林課だより～